



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会主義経済の課題と労働価値説:ヤ・ア・ペヴズネルの研究によせて
Author(s)	荒又, 重雄
Citation	経済學研究, 37(1), 1-16
Issue Date	1987-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31761
Type	departmental bulletin paper
File Information	37(1)P1-16.pdf



社会主義経済の課題と労働価値説

—— ヤ・ア・ペヴズネルの研究に寄せて ——

荒 又 重 雄

I

ヤ・ア・ペヴズネルは、現代日本経済に関する水準の高い豊富な研究をつみかさねてきたソ連の学者として、広くわが国に知られている。そのペヴズネルが、1978年に『国家独占資本主義と労働価値説』と題する研究を公けにしたのだが、その中には、マルクスの労働価値説に関連する研究がかなりのウエイトをもって収められていた。そこでは、労働の支出と成果の量的比較の問題が、マルクスの学説といわゆる限界効用学説との交錯をとおして、いろいろに論ぜられていたのである。この本は1980年に中野雄策、鈴木正の両氏の手で日本訳され、公刊された。この日本訳によせた特別のまえがき「日本の読者へ」の中で、ペヴズネルは、この本の中にあるマルクス経済学の理論問題への著者ペヴズネルの思索が、手応えのある反響を日本読者から得られるかも知れないことについて、あつち期待をのべている。時を経て、1986年秋にモスクワにおいて開催された定期的日ソ経済学シンポジウムの席上でも、ペヴズネルはほぼ同趣旨の論点を提示して、日本側の学者たちの応答を求めたという（北大スラウ研究センター教授望月喜市氏からの伝聞）。

ペヴズネルの上記の本が公刊されたときから、わたくしはこの問題についてのペヴズネルの言説になにがしかの関心をもってきていたのであるが、ペヴズネルの再度の呼びかけを知る

に及んで、ソ連経済の困難な課題についてのわたくし自身の理解の若干の深まりを前提にしながら、著者がのぞんでいるこの本への批判的接近を試みることにした。

まず、著者ペヴズネルの問題意識のあり方を確認することからはじめよう。

ペヴズネルは、日本版へのまえがきで次のようにのべている。「労働価値説の出発命題に注目」し、「それらを再把握すること」が必要である。「そのような再把握にあたっては、価値と使用価値との相互関係の問題が第一位をしめなければならないのだが、それは支出と結果の量的対比可能性の問題にたいする特別の注意をとめない、そのことがまた諸使用価値の量的対比可能性を前提する。この問題は、本書の中でとくに重要な地位をしめている。というのは、マルクスの諸著作からとりだされたいくつかの命題が一面的で正しくない取り扱いをうけているために、マルクス主義的経済科学のなかでは、量的対比可能性をもつのは労働つまり支出だけである、というまちがったテーゼがいまなおひろまっているからである。使用価値つまり有用性は量的に対比することができない、というわけである。このような接近方法をとる人々は、有用性の量的対比可能性という主張は、労働価値説の放棄とひとしく、また限界効用理論の立場への移行と同義である、という点で論争相手を非難する。著者は、そのような接近方法には断じて同意できないし、逆に私の確信するところでは、価値と使用価値、支出と結果の量

的対比可能性を論ずることを拒否することが、まさに、現代の経済的現実性——そのなかには、両世界体制の競争と闘争の諸問題も国家独占資本主義の諸問題も含まれている——を科学的に分析する方途を閉してしまうのである。』¹⁾

「使用価値つまり有用性」という表現や、「価値と使用価値」の対比を「支出と結果」の対比と並べている表現やを記憶にとどめた上で、いま少し著者のいうことを聞こう。

「マルクス・レーニン主義経済学は、商品関係に基礎をおく再生産過程においては、価値が主導的変数であり、社会的必要労働の支出が価値の尺度としてあらわれる、ということを示した。……しかしながら、分析にとって不可欠な諸変数、それらの相互作用、従属関係を明らかにするにさいして、次のことをはっきり理解しておかなくてはならない。すなわち、価値の理想的な尺度は存在しない、その尺度の探求は無益であるばかりか、空想的で、反動的でさえある仕事である、そうした探求は、結局のところ、『価値』を命令秩序のもとで決定するような毛沢東主義タイプの兵營『社会主義』以外へは通じていないのである。価値が、主導的変数であるにしても、同時にまさに変数であることを、一瞬たりとも忘れるわけにはゆかない。』²⁾

「社会的欲望ないしは社会的必要労働という概念は、労働の量的支出とその結果の必然的な連関を表現している。この概念は、〔支出の〕結果——これはこれでまた社会的欲望によって規定されている——を考慮に入れない支出概念としてのみ価値を解釈することに、鋭く対立するものである。このような一面的で粗野な、また俗流的な解釈にあっては（すなわち結果を無

視する場合には）、『労働価値』という概念は、怠け者や居候の精神的要求に迎合したものになってしまい、労働者階級のイデオロギーとは無縁なものとなる。』³⁾

「今日の現実において、社会主義経済の効率性の問題は、両体制の経済的競争の問題と、したがって、効率、労働生産性の一般的合法則性の分析と切りはなすことはできない。そして効率、労働生産性の測定は、支出と結果との、すなわち労働の支出と、これにもとづいて獲得される使用価値、有用性の大きさとの不断のダイナミックな量的比較の過程として以外おもいうかべることができない。マルクス主義経済科学はこの方向で大きな成果をあげており、ソビエトおよび外国の一連の学者たちの著作の中にそれを見ることができる。中でも傑出しているのは、レーニン賞受賞者ヴェ・エス・ネムチノフ、エリ・ヴェ・カントロヴィチ、ヴェ・ヴェ・ノヴォジロフの著作である。』⁴⁾

以上に引用してきたところで、ヤ・ア・ペヴズネルの、この問題に対する関心のあり方はすでに明瞭である。そもそも、あらゆる社会的生産は、それぞれのやり方で、社会的総労働をさまざまな使用価値の生産に配分しなくてはならないし、その配分が適切でなければ、その社会は生産力を浪費することになり、そのこと自身で社会の安定性へのマイナス要因を形成する。また、あらゆる社会的生産は、それが進歩的なものであるかぎり、労働の生産力の上昇への刺激を内包していなくてはならないのであって、その点について弱いところがあれば、その社会は内と外から絶えず動揺させられるであろう。ところが、ソ連社会主義社会は、まさにその二つの点で問題をかかえており、問題をひきおこし、問題の解決を遅らせているものに、マルクス経済学のあやまった理解がある。社会的需要や成果としての有用性やからの判定をぬきにし

1) ヤ・ア・ペヴズネル著、中野雄策・鈴木正訳『国家独占資本主義と労働価値説』、1980年、合同出版（以下訳書と略）、i 頁-ii 頁。

2) R. A. Певзнер, Государственно-монополистический капитализм и теория трудовой стоимости, 1978, Москва（以下ペヴズネルと略）стр. 60. 訳書、52頁-53頁。

3) 訳書、64頁。この部分は1978年ロシア語版の該当箇所にはない。

4) ペヴズネル 100 頁、訳書、90頁。

た投下労働価値説が、一方的で行政的で合法的でない「価値」の判定、を支え、成果を無視した投下労働による居なりの権利の主張を合理化している。こういうことでは、効率的な労働の配分も達成できないし、系統的な労働生産性上昇も確保できない。だから、このさい、そのようなマルクス理解を克服する必要がある。克服して行く方向はすでに与えられている。それはネムチノフ、カントロヴィチ、ノヴォジロフが示している方向である。マルクス学をその方向で再生していく鍵になる概念は社会的必要労働の概念である。と、このように読みとることができるのである。

ヤ・ア・ペヴズネルの問題意識は、わたくしにも首肯できるものである。資本制的商品生産へのマルクス主義的批判は、理論的にも実践的にも、それを揚棄しうるものでなくてはならない、つまり、限界を克服すると同時に、積極的要素を保持発展できるものでなくてはならない。資本制的生産においては労働の生産力が資本の生産力へと転形し、労働生産力の上昇の成果が労働者のものとならないという関係を批判することはよいとして、その批判が資本制生産を揚棄せず、自分のものとしての労働力の自覚発揮、たえず上昇する労働生産力を支えるようなものとしての発揮なしに、そこではあいかわらず自己の労働力を疎外されたものとしておきつづけながら、狭義の生活における生産物の享受のみに権利を主張するようなものであるとしたら、生産物の享受さえ停滞的なものにおち入り、労働生産力の上昇の成果をわずかなりと事後的に自己にとりもどすことのある資本制生産にさえ劣るものになってしまうであろう。また、商品生産が価値の生産と実現を切りはなし、しばしば生産された価値を廃棄してしまう無政府性を一つの特徴としていることへの批判はよいとしても、その批判が、社会的な労働配分のありうべきバランスの達成を、真の人間的社会的欲望にあわせて、絶えず追求していくことなしに、あるいは一方的行政的に人々の欲望

を断罪し、あるいは投下した労働にもとづく権利のみ主張するようなものであるならば、これまた、実現しないでしまう大量の商品価値の損失をひきずりながらも、なお社会的欲望に即応した財貨・サービスを次々につくり出して、生産者としての犠牲の代償を消費者として享受する商品生産にさえ劣るものにとどまってしまうであろう。

ヤ・ア・ペヴズネルが、今日の社会主義の停滞を弁護してしまうことになる理論を克服するために、ネムチノフ、カントロヴィチ、ノヴォジロフの線でマルクスの理論を発展させようとして社会的必要労働の概念にもどったとき、ある程度当然のことではあるが、そこにあらわれてくるのは社会的必要労働論争における需要説の系譜に属する一つの考え方である。ペヴズネルは、マルクス主義がいまだ十月社会主義革命の正統性を証する教義としての地位を維持しているという条件のもとで、マルクス自身の叙述を再読することの中から、今日の社会主義の発展のために役立つ理論を抽出しようとするわけである。

わたくしにとっての問題は次のごとくである。第一に、ヤ・ア・ペヴズネルは、資源配分の市場的あり方を理論化した限界革命以後の理論をどのようにマルクスの理論と接合しようとしているのか、それは適切なやり方であるといえるのか否か。第二に、ヤ・ア・ペヴズネルが商品生産のもつ合理性を再認識し、これを社会主義社会の発展に積極的に揚棄しようとするさいに、商品という生産物の歴史的社会的形態規定の合理性と限界性をどのように理解するのか、マルクスの理論の中から、商品という歴史的形態を克服したのちにあらわれる何か別の歴史的形態を支える社会的諸規定を発見しているのか否か。

II

ヤ・ア・ペヴズネルの言説の中から、わたく

しにとって同意できる場所を確認することからはじめて、問題を煮つめてゆくことにしよう。

「マルクス経済学は、価格と価値との相互関係の問題を分析するにあたって、有用性の役割を否定するのではなく、それにふさわしい位置を有用性に与えるのである。マルクス経済学は、第一に、なによりも生きた労働および対象化された労働の支出としてあらわれる生産費との、第二に国民所得の分配との、絶えざる対比において有用性を考察しているのである。」⁵⁾いうまでもなく、国民所得の分配は、ここでは、そのあり方が需要の構造をかえるものとして注目されているのであり、問題はない。

「労働のまさに現実的有用性の大きさは、決して労働の総量にのみ依存しているのではなく、労働がどのような種類の具体的労働に振り分けられているか、労働がどのような種類の商品やサービスの生産に配分されているか、にも依存しているのである。」⁶⁾この文章も、有用性の量的規定性をどのように与えるかというむづかしい問題を一応棚上げすれば、支出される諸具体的有用労働のバランス如何によって、つまり労働の社会的配分のあり方如何によって、社会的総労働量が同一であっても国民の幸福度に大きな差異が出てくることを指摘しているのであって、まさにペヴズネルの関心の中心問題が率直にのべられてもおり、全く問題はない。

ペヴズネルはまた、『資本論』の中でマルクスが市場価値に言及したところから引用しながら、「需要の側に、ある大きさをもった一定の社会的欲望がある」が、「この欲望の量的規定性は弾力性あるまったく変動しやすいもの」であり、社会的欲望の「固定性は外見にすぎない」とマルクスが考えていたのだということを読者に示している⁷⁾。これは、古典的には R. マルサスが商品への需要の強さと大いさという

二つの次元を区別し、A. マーシャルやその後の経済学が需要の価格弾力性や所得弾力性ということで、それらについて異なった値を示す様々な需要曲線が図式的に説明するに到っている問題を、マルクスもまた念頭においていたことをのべていることになっており、適切な指摘であるといつてよい。

同時にペヴズネルは、マルクスがその点でなお R. マルサスよりは A. スミスから直接に自分の理論を継承している部分を、必ずしも明瞭な意識のもとではみうけられないにしろ、引用している。すなわち、ペヴズネルに引用されつつマルクスは、「ある商品がその市場価値どおりに売られるためには、すなわちそれに含まれている社会的必要労働に比例して売られるためには、この商品種類にふりむけられる社会的労働の総量が、この商品にたいする社会的欲望すなわち支払能力ある社会的欲望の量に対応していなければならない」、「もし市場価値が下がればその商品にたいする社会的欲望は平均的に増大して、……もし市場価値が上がればその商品にたいする社会的欲望は小さくなる」。「需要供給が市場価格を調整するとすれば、またはむしろ市場価値からの市場価格の偏差を調整するとすれば、他方では市場価値が需要供給関係を、または需要供給の変動が市場価格を振動させる中心を、調整するのである」、と語っている⁸⁾。ここでは、支払能力ある社会的欲望を充足するために、それだけの総量を生産することにむけられた労働が、そこにおける平均的労働生産性を基準とした社会的必要労働として評価されて市場価値となり、その市場価値で規定されている需要供給の関係が、こんどは社会的分業の部門間バランスの調整を市場価値からの市場価格の乖離をつうじて行なうのだ、とのべられているのである。そのことの問題はのちに触れる。

ヤ・ア・ペヴズネルは、社会的労働の配分を論じつつ、第1表を説明に利用している。一見

5) ペヴズネル68頁、訳書60頁。

6) ペヴズネル79頁-80頁、訳書71頁。

7) ペヴズネル82頁、訳書73頁。

8) ペヴズネル88頁-89頁、訳書80頁-81頁。

第1表 一定労働時間に産出される有用性

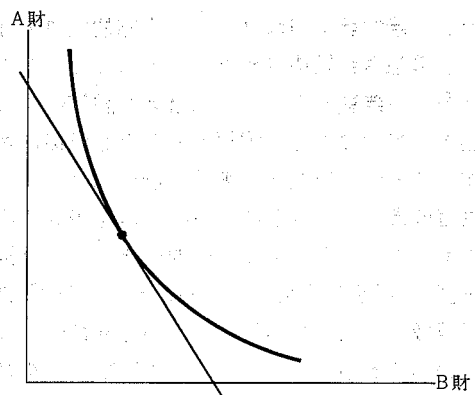
欲求 飽和度	A	B	C	D	E
I	50	40	30	20	10
II	40	30	20	10	5
III	30	20	10	5	4
IV	20	10	5	4	3
V	10	5	4	3	2

(ペヴズネル 113 頁)

してあきらかなように、これは例の、限界効用の逓減と、最適な部門間バランス、つまり均衡を説明する限界効用均等を示す表と全く同質である。効用の大きさは飽和度に対する不足として示されているが、本質的な差とはみとめられない。特徴的な点は、労働価値説から出発して、この表にある25個の数値のいずれもが、平均的な単純労働が同一の労働生産性をもって同一の時間に産出する有用性を示している、としているところである⁹⁾。縦に同量の現物がならんでいるばかりではなく、横にも同じ投下労働量がならんでいる、ということである。

25個の数値となってあらわれている有用性の量が何を示すのか、そのむかしに論議されたような満足なのか、もっと具体的な交換比率を示すのか、欲望の飽和度とはそれとどうちがうのか、というようなことどもについての深追いはやめておくとするれば、社会的生産のありうべき部門間バランスを説明するモデルとしてうけ入れることができる。わたくしも以前に第2表のようなモデルを用いて、社会的生産の弾力的な部門間バランスとありうべきバランスを示す点とを図示してみたことがある¹⁰⁾。原点に凸な曲線は、A財とB財の代替関係を示し、直線はAB両財にむけられる一定量の社会的労働量によって産出可能なAB両財の組み合わせを示している。いうまでもなく、これはいわゆる無差別曲線の読みかえであって、収支線に当る直線を

第2表 社会的生産の弾力的部門間バランスとありうべきバランスを示す点



やや原点に凹な生産可能曲線におきかえて、なおこれを一定の社会的労働量によるそれと考えた方がモデルとしてはより適切かも知れない。そのようなわけで、わたくしもまたペヴズネルと似たようなことを考えてきていたのである。

そのように社会的生産の部門間バランスに決定的に関与する需要について、ペヴズネルはいう。「需要のマクロ経済的機能は、さまざまな用途をもつ大量の商品やサービスのつりあいが需要によって形式される、という点にある。生産は産出し供給する。社会は供給されたものを評価する。この評価は需要の機能であり、最高度に能動的な機能であって、かくしてまさに需要が生産をして継続せしめ発展せしめ、また生産を転換せしめるのである」¹¹⁾。これは全く正しい発言である。商品生産は無政府の生産であるから、この評価は原則的に事後的である。そしてしばしば、生産された価値は実現されず、商品は利用されることなく、つまり使用価値としても実現されることなく終る。実現の困難はいわば法則的に繰り返されるのである。需要の側からの評価や、評価の徴候は、価格の変動という形をとった情報として与えられる。商品世界の一環としてあるとはいえ、世界の全体像を見渡す立場にはない生産者は、価格の動きから

9) ペヴズネル113頁、訳書102頁。

10) 拙著『価値法則と賃労働』、1972年、厚生閣、23頁。

11) ペヴズネル83頁、訳書73頁。

全体世界の動きを察知しつつ行動するのである。

社会主義的計画経済は、その実際的成果ではなく、構想され期待されたものとしては、そうした多くの無駄をともなった事後の評価による調整としてではなく、需要のあり方を直接に察知することから出発する事前の計画により社会的生産のありうべき部門間バランスを達成すべきものだったのである。需要のあり方の直接的把握は、価格の変動にあらわれるより先に、諸財が消費者のもとで消費されていく直接のうごきを察知する中で、あるいは小売段階での諸財の流れのスピードの観測の中で、あるいは少くとも生産流通の諸段階における在庫の変動の情報を点検しつつ行なわれるものと期待されていたのである。現実の社会主義経済が今日までに達成した実際的成果が、局所的な生産者としての権利は保証するが、消費者としての欲求の満足をまさに社会的生産の部門間バランスの適切な計画において保障しないならば、需要のあり方は価格シグナルにあらわれぬばかりか、不生産的流通費の削減の名のもとに在庫シグナルにもあらわれなくなり、待ち行列の長さにかあらわれぬ事態となってしまうのみならず、しかもその行列シグナルさえも人々のあるべき生活構造に対する一方的行政的判断によって低い位置づけしか与えられぬことになっているとすれば、ヤ・ア・ペヴズネルが需要の役割を声を大にして叫び、日本のマルクス学者にさえ討論をよびかけようとしているところもちはよく理解できるのである。

ペヴズネルが社会的生産のありうべき部門間バランスを規定する需要の作用についてのべるとき、いつも、価値からの価格の乖離あるいは投下労働と労働の成果とのズレ、という形で、出発点としての労働をまず設定して、のちに進もうとする強い志向をもっていることにも好意的に注目しておきたい。「任意の資本主義諸国の国民経済の歴史、それは労働支出によって規定されている価値から上下に、有用性の乖離を

反映する価格の乖離の歴史である。」¹²⁾「運動の法則、その本質は価値から価格の不断の乖離にある」、「一時間のうちに同一の有用性が生産されるというのは、実在的現実の中では通例ではなく例外であるような抽象である」¹³⁾。これらの文章が、ペヴズネルの文脈の中では、乖離すること、ズレることを強調しているのであって、価値であるとか、労働支出であるとかのみにこだわっているわけにはゆかないことを主張しているのももちろんだが、わたくしはあえて、乖離すること、ズレることは、どこから乖離するのか、どこからズレるのかという出発点、中心点の承認なしには存在しえない表現であることに注目しておきたい。

同様にペヴズネルが、有用性の問題を考えるときに、個々の経済主体に即した主観的効用をではなく、社会的生産全体の部門間バランスに関連するものを考えようとしていることにも好意的注目を与えておきたい。また、そのようなバランスを考えるさいに、社会的労働の二重性の問題をほんの一瞬だが想起していることにも注目しておきたい。すなわち、ペヴズネルはいう、「経済学の範疇としての使用価値は、これは物やサービスの（他の諸科学によって研究されている）物理的特質ではなく、労働および分配の社会的諸条件の影響のもとで形成されているところの、使用価値に対する人々の関係であるということが、つねに念頭におかるべきである。……有用性も、経済学的意味ではあれこれの商品に対するあれこれの個人の直接的有用性のようではなく、（支出と分配の局面での）価値と使用価値との矛盾をはらむ統一のように考察しなくてはならない。」¹⁴⁾「具体的および抽象的労働の概念は、一方では、生産過程において人々が、特定の、多様性において限りない種類の商品やサービスをつくり出しているという事実を、しかし他方では人々が、彼らの労働の

12) ペヴズネル114頁、訳書103頁。

13) ペヴズネル115頁、訳書104頁。

14) ペヴズネル84頁-85頁、訳書75頁。

具体的側面から独立した、あたらしく生産された価値の分配への参加者として立ちあらわれるという事実を規定している。」¹⁵⁾

使用価値は使用価値に対する人々の関係である、といった若干混乱した表現だとか、具体的有用労働が富の総体に関係し、抽象的人間労働の方はといえば個々人の権利関係であるかにもうけとられる表現だとかには、もちろんわたくしの見解を留保するが、とりあえず、ヤ・ア・ペヴズネルがここで社会的労働の二重性を想起しているという、その一点に注目し、共感を表明しておきたい。

III

さて、提出された問題、すなわち労働の社会的生産性を経済学的に把握する、とりわけ社会的生産のありうべき部門間バランスを経済学的に把握するための方法的端緒を、ヤ・ア・ペヴズネルはどこに求めようとするのであるか。日本の読者にあてたまえがきで率直に端的にのべてるように、「諸使用価値の量的対比可能性」である。

問題にとりくんでいる第2章の題は、「経済の尺度の多様性と価値尺度としての労働」というものである。そして、「人々のあいだの生産諸関係または経済的諸関係の分析は、交換および消費のために生産されるすべてのものに対する社会評価なしには考えられない」¹⁶⁾と書き出されている。少し進んだところには又、次のようにある。「絶対的な需要（生命維持のために不可欠な熱量など）これは動物界の概念である。人間社会では需要は二つの意味で、一つの同じ欲求の満足のために極めて多様な方法があるという意味で、また、とくに、欲求の充足は生産・分配・交換の社会法則と強く結びついているという意味で、相対的である。尺度の無限性、これは人間社会の数千年にわたる発展の中で生

成したものである。それは労働の種類、労働への態度、欲求、慣習、嗜好、見解、評価等々の無限の多様性のことである。」¹⁷⁾と。この文章を見据えるならば、ここでペヴズネルの脳裡にあるものが、厩大なる財貨とサービスの集成のうちの、まさに使用価値側面、その面でみた無限の多様性であることがわかる。無限に多様な財貨やサービスを、まさにその無限さのままに、人々の欲求に極限にまで合致した形で産出させる方策や如何に、が課題とされているのだから、ありそうなことでもある。

さて、ところで、ペヴズネルはつづける。「尺度の無限性それ自体は、正確な測定が不可能なことと同等である。」「経済分析に関していえば、尺度の無限性が克服されたときにはじめて、科学的性格を獲得する」¹⁸⁾であるから、単一の尺度、あるいはそれに近いものがぜひとも必要なのである。しかし「このような尺度を、際限のない要因、幾百万の人々（生産者および消費者）のたえず変化し、量的に対比不能な嗜好、願望、意図、可能性によって比較測定が左右される有用性の部面に見出すことは無条件に不可能である。価値の尺度の探求において科学が立脚できる唯一の要素は労働である」¹⁹⁾。つまり、ペヴズネルは、無限に多様な使用価値を評価する尺度として、労働にたどりつくのである。厩大な商品の山の姿に、その使用価値と商品価値とを区別し、後者の側面においては質的に同一、量的にのみ区別されるものであるゆえに、そこに注目して抽象的人間労働を発見したマルクスの推理とはちがったものである。

いま少しペヴズネルの論理を追ってみよう。「マルクス・レーニン主義経済学は、商品諸関係にもとづく再生産過程においては、価値が主導的変数であり、社会的必要労働の支出が価値の尺度として登場する、ということを明らかにした。」「価値の理想的尺度は存在しない。」²⁰⁾

17) ペヴズネル57頁-58頁、訳書50頁。

18) ペヴズネル58頁、訳書51頁。

19) ペヴズネル62頁-63頁、訳書53-54頁。

20) ペヴズネル60頁、訳書52頁。

15) ペヴズネル80頁、訳書72頁。

16) ペヴズネル56頁、訳書49頁。

「科学的経済学は、価格形成に影響をおよぼすすべての要因の中から、主要なものとして労働を見出している。」²¹⁾「価格は、異なる使用価値をもつ諸商品の量的相互関係にしたがって、すなわち異なる商品やサービスの有用性の相互関係におうじて、またこれらの相互関係があらたにつくり出される価値の分配に依存していかに形成されるかにおうじて、交換の過程において直接に成立する。マルクス経済学は、価格と価値との相互関係の問題を分析するさいに、有用性の役割を否定するのではなく、それにふさわしい地位を与えるのである。」²²⁾「もちろん、諸使用価値の通約可能性という問題の科学的解決は、多大の困難をともなう。」²³⁾しかし、問題解決の可能性と必要性を否定してはならない。「諸使用価値の通約可能性は、分業と交換にもとづいているすべての社会にとって特有のものである。」²⁴⁾市場の法則は「商品とサービスの有用性の数量的比較計算なしには絶対に考えられない。マルクス主義経済学は、労働がつくり出す生産物の有用性によって労働支出が不断に修正されるという事実を、自己の要石の一つとみなしている。」²⁵⁾ベウズネルは、価値を出発点にしながら価値から乖離する価格に有用性なり使用価値なりの尺度をみようとしているのであり、しかも価値から出発するゆえに尺度は労働から出発することになるのだと考えているものと思われる。

ともあれ、ベウズネルにとって、使用価値の均一の尺度と価格とは切りはなせない。商品価値のように使用価値を尺度できないとする理論家に、ベウズネルは激しく反論する。ベウズネルが批判の対象として取り上げているのはヤ・ア・クロンロード（彼の1973年の論文）である。批判されている命題は簡単である。「長靴と卵、セメントとバター、等々を加算すること

はできない」、「具体的な社会的有用性を抽象的有用性に還元する方法を提案したものはいない」。これに対するベウズネルの反論は、「相異なる物を加算するというようなことはだれも思いつかないことであるが、価格で表示された諸物の使用価値を加算することは可能であるのみならず、絶対に必要でもある。」、相異なる商品の使用価値の数量的比較（もちろんこのことは加算を前提とする）は、つねにどこでも行われているし、それなしにはどんな経済も成立しえない。それは価格の助けで行われる。」「等量の抽象的平均労働時間の、費やされている二つの商品が、個人にとっても社会にとっても、その有用性をまったく異にするということが、クロンロードには本当にわからないのだろうか？ 実際には諸商品の有用性は、労働の支払によって規定される大きさからつねに乖離している。」等々というものである²⁶⁾。又、次のようにもいっている。「若干の経済学者たちが、もっとほかに使い途のありそうな強靱さで否定している『加算性』という特質が、個々の商品やサービスにないとするならば、どうしたら国民経済の規模で（あるいは個別部門の範囲でさえ）有用性を測定できるのであろうか」²⁷⁾、と。

ここには、基数主義にもどくもっとも単純な限界効用説に立ち、価格を基礎づける効用そのものは如何に測定しうるやと問いかけた批判者に対して、われわれは日々効用を価格をもって測定しているではないか、それは動かしえないわれわれ自身の体験ではないか、といらだちをこめて反批判したかつてのペーム＝バヴェルクを想い出させる反論がある、といわなくてはならない。すでにのべきたっているように、わたくしは社会的生産の部門間バランスの問題の重要性をみとめ、ありうべきバランスと、それからのズレとを測定する問題の存在をみとめ、商品経済においては、価格の価値からの乖離がその測定の基本的なあり方になっていることをみ

21) ベウズネル63頁、訳書56頁。

22) ベウズネル68頁、訳書59頁-60頁。

23) ベウズネル74頁、訳書64頁。

24) ベウズネル78頁、訳書67頁。

25) ベウズネル74頁、訳書64頁-65頁。

26) ベウズネル77頁-78頁、訳書70頁。

27) ベウズネル77頁、訳書66頁。

とめている。しかし、ペヴズネルの論立てはあまりに無批判に価格により添いすぎている。社会主義経済の現段階を批判する軸として、資本主義における価格のうごきに着想をえた何かを置くことは大いに結構である。しかし、価格が、社会的分業の部門間バランスを表現する特殊商品生産的形態であるという位置づけを忘れてもらっては困る。商品価値は抽象的人間労働の凝固物である。その質も量も、しかしそのものとしては社会的形態を与えられない。他の商品の使用価値とその量において、つまり等価形態の位置にある商品の一定量において相対的に形態を与えられる。価格は、まず独占的に等価形態に立つ貨幣による価値の表現である。そして、もともと抽象的人間労働の系譜に属する価格の大きさ、その変動において、産出される諸使用価値のありうべきバランスとそれからのズレが表現されるのである²⁸⁾。ことがらは二重に屈折しているのである。また効用から出発しても、今日、ペーム＝パヴェルク流の素朴な議論をたてる人はほとんどいない。

もちろん、ヤ・ア・ペヴズネルは、パヴェルクのように素朴な主観的価値＝効用に立脚しようとしているのではない。商品価値とか労働の支出とから出発しようとしているのである。ではどのようにか。まず労働に注目すべきである、というときのペヴズネルの理由づけは次のようなものである。「価値と価格の基礎によこたわる要因として労働に注目する理由はどこにあるか。第1に、その普遍性に、様々な生産要因の中で労働が、任意の生産過程のために端緒的かつ不可欠な要因として立ちあらわれているという点に、ある。」²⁹⁾ペヴズネルはこのあと、「労働がはらんでいる弁証法的矛盾」を、労働が人間の喜びであるとともに苦痛でもあること、として説明し、さらに未来社会をそこでは労働が一種の娯楽であるようなものとして描く

のは、偽善者か空想家である、とのべたあとに、また次のようにのべる。「なぜ労働が価値の基礎におかれるのか、という問題に答えるにあたって、いろいろな種類の労働の差異はその結果の差異よりは大きくない、ということを経ひとも考慮する必要がある。どんなに大きな差異のある場合でも、労働は肉体的、精神的力の支出と結びついた生理学的過程であり、その意味で同質の（同種の）要因、つまり労働の結果が異なっているようには具体的現象において異なること少ない要因である。」³⁰⁾

これらの文章が、「価値尺度としての労働、および労働支出と有用性との必然的通約性」という題の節に見出されるものであることを想いおこした上で、わたくしは言わねばならない。ペヴズネルの念頭からは社会的労働の二重の規定性、すなわち具体的有用労働と抽象的人間労働という二つの規定の対立と統一の問題がほとんど全くといっていいほど消失している。もっとも、これは、ヤ・ア・ペヴズネルに限ったことではないのであるが、社会的労働のありうべき部門間バランスの問題にとりくむときには、まさにこの、社会的労働の二重性の問題に立ちもどることが必要なはずである。わたくしの考え方を少しのべてみよう。

K. マルクスは、資本制的生産のおこなわれている社会の富は膨大な商品の集成としてあらわれている、とみた。商品がただの生産物ではなく、まさに商品であるゆえんは、それが使用価値と交換価値の二重物であるところにある。任意の二商品を、交換価値として同質で相互に区別なく、使用価値としては異質で相互に対立しているものとして対置した上で、マルクスは、使用価値および交換価値という商品の二要因の奥に、具体的有用労働と抽象的人間労働をみたのである。それは、社会的生産の主人たちの社会的労働の二側面、すなわち一方は、その社会が必要とするまさにさまざまな使用価値を生み出すために、まさに様々な具体的有用的な

28) 拙稿「『資源配分』と労働の二重性」、北海道大学『経済学研究』第30巻第4号(1981, 3)。

29) ペヴズネル63頁、訳書56頁。

30) ペヴズネル65頁、訳書58頁。

形態をもって社会的労働が支出されている姿であり、他方は、その様々な具体的形態を支えている社会的総労働の姿、いずれにしろ、それが一つの総労働の一分肢であることを示している姿、なのである。抽象的人間労働は、生理学のプロセスというところに力点があるのではなく、そこまで戻れば区別がない、という意味での、一つの社会に属する総労働力の一部、その意味で同質の労働である、というところに力点があるのである。そして、社会的労働の二重性は、商品経済においては、商品の二要因となって現象するとはいえ、生産物が商品とはならぬ社会にも、およそ社会的生産があれば労働は二重の性格をもってあるのである。抽象的人間労働が、個々の労働を対置したときにみられる普遍性だとか共通性だとかいうものであるより先に、一つの社会に属する総労働力のそれぞれ一分肢であるというところに根拠があるように、具体的有用労働、その成果としての使用価値の比較の問題は、個々の使用価値の比較また通約の問題であるよりも先に、諸使用価値産出の構成的バランス、社会的分業のバランスの問題なのである。

ペヴズネルが「価値尺度としての労働」というとき、尺度されるもの、つまり尺度をあてて測定されるものは何なのであろうか。K. マルクスの場合は、価値とは抽象的人間労働の凝固物なのだから、これにもともと含まれている量的規定は労働時間であり、これこそが価値の内在的尺度であった。しかし、社会的なダイナミックな現実一步接近すると、抽象的人間労働の凝固物である価値を測るものは、それ自身価値物でもあるところの貨幣商品であった。それ自身重さをもつ銅が重さを量るのと同じである。ところでペヴズネルは「価値尺度としての労働」という。ここでは、測るものが労働であり、つまり尺度となっているのが労働であって、測られる価値は——使用価値である。種々様々な使用価値を測るためには、またそれらが社会の個々の成員に与える満足度を測るには無限

に多様な尺度がいる。しかし、不完全でも一つの尺度にまとめることはできぬか、と問題が立てられていたのだった。すべてがここからほぐれてくる。

ペヴズネルにとって、有用性を測っているのは価格である。これは単一の尺度である。これが到達目標である。そこに到達するために、なるだけ単一の要因から出発したい。そして労働が選ばれたのだ。そうであるから、労働は、いくつかの生産要因の一つにすぎない。普遍的であり、比較的に同質的である、ということの説明も、社会的生産の主体として考察するのではなく、個々の具体的有用労働を比較する、という次元において与えられているのである。

今日の経済学で価格と呼ばれているものが、時と場合によって非常にちがったものであることをいまいし吟味すべきであろう。そうしなければマルクス経済学の原理と最適化理論との結合はむづかしい。社会主義経済における部門間バランスの問題を考えると、使用価値と交換価値が分離し、生産者にとっての使用価値が交換価値の担い手である故に、やむをえず必要なものであって、買い手が要求するからつくるだけであって、自分にとってはどうでもよいものであるような、しかし自分は、交換価値を実現した貨幣を手にするや、切り札を手にしたギャンブラーのごとく偉たけだかになるような、そういう組合せではなく、しかしまた、自己の具体的有用労働がどのように社会の人々に有用な使用価値をつくり出しているかに関心もなく、しかし自分の支出した抽象的人間労働にもとづく権利のみは主張し、だがまわりまわって自分の求める有用物を発見できないでいるような欠陥社会主義をではなく、もっと社会的に有効な社会的労働の二重性の特殊なあり方が求められているのである。

ヤ・ア・ペヴズネルは、異質のものは加算できない、と明言しながらも、最後には加算してしまっている。理想的尺度はない、として労働量を近似的出発点として、これへの修正におい

て価格という有用性の単位を見出し、加算性もみとめている。具体的有用労働と抽象的人間労働の対立をみとめながらも、具体的有用労働の有用性を抽象的人間労働で測り、同時に、抽象的人間労働の大きさを具体的有用労働との関係のもとに規定しようとしている。かくて多くの理論的混乱が発生してしまった。

今日、基数主義的効用理論を主張しつづけている人はほとんどない。原点に対して凸な無差別曲線を想定する場合にも、より右上にある線はより右下にある線よりも概していえばより幸福な状態を示すと想定されているが、その想定は絶対的なものではないし、ましてや、簡単に幸福度の比を与えるものとは想定されていない。抽象的人間労働についていえば、もろもろの財貨・サービスにおいて示されている抽象的人間労働の量的比較においては簡単とはいえぬ問題が次々に発生するとはいえ、ある時期のある社会の社会的総労働力の支出としての総抽象的人間労働量は、理論的に明瞭なものであり、経験的にもかなり明確である。一国生産可能年齢人口のうち、どれだけが社会的生産に参加したか（「労働力率」——社会的総労働力への参加率）、個々の労働力の合成としてのそうしたマクロの労働力（労働力軍）に参加したものたちによって、延労働時間にしたときどれだけの労働力支出があったのか、こうした数値が今日ある程度直接に計測されていることを、今更くどくどしくいうことはない。

問題はひたすら、社会的総労働力支出の物的（使用価値面での）生産性の問題であり、部門間配分の有効性の問題である。それらは、価格に反映するものであるが、価格にだけ反映するものではないし、価格において十全に反映するものでもない。社会主義経済の課題は、二つの側面をもつ社会的労働の効率性の問題を、商品価格を超えるような信号体系の利用によって絶えず解決するシステムの発見であろう。

IV

ヤ・ア・ペヴズネルは、労働から出発して価格に至る使用価値測定の尺度の展開を、「労働の量的支出とその結果とのあいだの必然的連関」と表現していた。労働の量的支出とは、労働力の生理学的支出をいみし、結果とは、産出した使用価値の有用性をいみするとみてまちがない。その「必然的連関を体現している」ものを、ペヴズネルは「社会的欲望ないしは社会的必要労働の概念」とおいている³¹⁾。「労働がつくり出す生産物の有用性によって労働支出が不断に修正される」³²⁾ともいっている。

この問題を展開するにあたってヤ・ア・ペヴズネルは、1870年代以来展開した限界分析の手法に注目し、これを積極的にとり入れようとしている。そのための予備的な考察としてマルクス派以外の経済学の流れを第1章において通観し、その中で次のように言っている。すなわち、19世紀の最後の30年以来、ブルジョア的経済科学の中には三つの大きな流れが結合している。第1は経済の理想としての自由競争、第2は生産の三要因説に照応した公正分配としての帰属原理、第3は財やサービスの有用性の大きさを規定するための限界量の利用である。第1と第2の流れは現実の歴史に照応していないが、第3の流れには学ぶものがある、と³³⁾。

そしてペヴズネルは、「労働支出と有用性の量的比較手段としての限界値」と題する節をもうけ、「有用性を定量化する方法、有用性相互の量的対比方法、有用性と労働支出との量的対比方法の探求は、経済科学を限界値の利用の合目的性へとみちびいた」³⁴⁾「限界値に注目するにあたって出発点になる立場は、人間が利用するすべての財貨（блага, goods）は無限なものとは有限なものとは分かれる、という点にあ

31) 訳書64頁。

32) ペヴズネル74頁、訳書64頁。

33) ペヴズネル33頁、訳書23頁。

34) ペヴズネル100頁、訳書90頁。

る」³⁵⁾、資源の有限性は天然資源には限られぬのであるから、一般に「価格は劣等な企業の諸条件によって規定される」³⁶⁾、「限界値が直接にかかわりをもつのは、価値にたいしてではなく、価格にたいしてである」³⁷⁾、「経済科学は、価格形成問題の研究において、現在までに大きな進歩を達成した。数学的手法を適用して、一方では多くの未知数をもった連立方程式の解決が可能となり、他方では、無限小の数値を分析する方法の適用によって、運動としての価格形成を研究する可能性がひらかれている。こうした目的に役立っているのは、投入・産出分析、線形プログラミング、回帰分析とスペクトル分析、ゲームの理論、といった経済科学の重部門である」³⁸⁾、等々とのべている。

ヤ・ア・ペヴズネルは、保守的マルクス経済学者を批判し、そうした学者の理論の影響下にある人々に語りかけつつ、K. マルクス自身の理論の中には今日の経済学の積極的理解に連なる多くの命題が存在しているものであり、あるいはK. マルクス自身が今日にあれば率直にそのように語っていたかも知れないのである、とのべているものと思われる。その意図について、わたくしはむしろ共感しているのだが、問題はどのように新しい概念をマルクスの範疇体系に接合するかである。

出発点としてのマルクスの範疇を捨てることができないこと、いわゆる限界効用学説をそのまま単純に受容できないことの理由を、ペヴズネルはたとえば次のようにのべている。「さまざまな商品やサービスの有用性は、所得の分配が行われたあとで、行われた分配にもとづいて需要関係が確定されたのちに規定される」³⁹⁾。「経済における限界値への科学的接近方法は、限界値を否定するという点にあるのではなくて、まったく別の点に、すなわち、限界自体が

社会的性格をおびており、それが生産諸力の発展水準や方向、社会体制、社会生活を成り立たせている無数の多様な要因に依存している、ということを理解する点にある。⁴⁰⁾」「交換にもとづく経済を研究するにあたっては、価格の価値からの乖離を支配する合法則性の分析は、均衡の分析が必要なと同じように必要である。……資本主義の歴史のうえでは、経済恐慌と関連して人間の第1の必須の欲求をなすものが意図的に破壊された——小麦が焼却されたり牛乳が大洋に投棄されたりした——といった多くの実例が知られている。」⁴¹⁾

最後の部分であきらかなように、価格の価値からの乖離は、ペヴズネルにおいて、単に量的な乖離にとどまらず、価値の実現、非実現の問題をも含むものとして設定されていることになっている。また、ペヴズネルがその点について何の評注もなしに引用しているK. マルクスは、「ある商品がその市場価値どおりに売られるためには、すなわちそれに含まれている社会的必要労働に比例して売られるためには、この商品種類の総量にふりむけられる社会的労働の総量が、この商品にたいする社会的欲望すなわち支払能力ある社会的欲望の量に対応していなければならない。」⁴²⁾と書いて、社会的必要労働の概念が価格ではなく、あくまでも価値の側の量的規定であるとのべている。もちろん、そこにある価値は市場価値であって個別価値ではない。価値は、分析の当初から社会的なものであって、その量は社会的必要労働によって規定されていた。そもそも抽象的人間労働とは、その労働が社会的総労働力の一分肢としての支出であることを示しているのだから、平均的な熟練・強度・生産条件によって規定される標準によって評価されてはじめて量的に規定されうる、ということであった。社会的労働の部門間バランスが考慮される論理次元に到達すると、この

35) ペヴズネル101頁、訳書91頁。

36) ペヴズネル105頁、訳書94頁。

37) ペヴズネル108頁、訳書96頁。

38) ペヴズネル116頁、訳書105頁。

39) ペヴズネル80頁、訳書72頁。

40) ペヴズネル107頁、訳書95頁。

41) ペヴズネル114頁、訳書103頁。

42) ペヴズネル88頁、訳書80頁。

規定はより具体的に再規定されることになる。つまり、ある商品種類をどれだけ生産するのかに応じて、その生産にむけられる労働の熟練・強度・生産条件の分布は多少とも変動するから、その平均水準は変動し、社会的必要労働も変化する、ということである。そうして再規定された市場価値はなお価格とはちがう。そのことに、ペヴズネルは完全に同意しているのだろうか。

K. マルクスの場合は、R. マルサスのように需要を設定し、所与の供給と所与の需要、それぞれの価格弾力性をもった両者が、売らねばならぬ、買わねばならぬ絶対的な必要なしに需要量と供給量を一致させている姿ではなく、上にみたように、社会的必要労働を背景にした供給と、そういう社会的必要労働を前提にして支払能力ある需要とが向かいあい、供給量と需要量が一致しなかったときには社会的必要労働で示される市場価値から様々に乖離した市場価格を成立させる A. スミスのな表象を提示しているのである。ペヴズネルは、いわゆる社会的必要労働論争における需要説への傾斜を意図としては示しながら、明示的に自己の説を語ってはいない。たとえ K. マルクスから出発したとしても、どこまでも同じである必要はないのであって、まさに A. ヤ・ペヴズネルはマルクス以後的な限界分析に注目するのであるから、マルクスがのべていたのはここまでであって、ここから先はマルクス以上である、とか、ここから先はマルクスとはちがう、とか、率直に語るべきなのである。ペヴズネルの考える社会的必要労働はマルクスのそれと同じなのか違うのか、ペヴズネルの考える社会的必要労働は価格を規定しているものなのか、そうではなく価格は社会的必要労働からの乖離なのか。100年以上も昔の K. マルクスとわれわれが全てにおいて一致している必要などさらさらないのである。

ヤ・ア・ペヴズネルは、K. マルクスではなく、マルクス経済学者のドグマから脱出しよう

としている。その姿勢は、サービス労働の社会的性格をめぐるソ連での論争への態度にもあらわれている。ペヴズネルは、「抽象的労働としてのこの種の労働は、それ以外の種類の労働と少しも区別されるところはない」⁴³⁾、として、サービス労働が価値生産的であるという理論の側を支持している。ブハーリンやデボーリンの論議、コーンやとりわけルービンらによって展開された論争が1934年に不幸な終結を強いられてしまったソ連の学者に対し、あまりきついことをいうわけにはゆかないのだが、抽象的人間労働ということと価値生産的労働（さらには剰余価値生産的労働）ということとの間には次元の相異があることが忘れられている。今日の世界で、日本やアメリカにおいてもソ連においても、サービス労働の大部分が社会的労働の一環であり、そのいみで抽象的人間労働でもあるということはまちがいが無い。しかし、社会的労働の二重性の一側面たる抽象的人間労働が、いつも商品価値を自らの表現形態とするわけではない。抽象的人間労働はおよそ社会的生産のすべてにあてはまる概念であり、商品価値は商品生産に固有なのである。

K. マルクスのいう生産的労働とは、剰余価値を生産する労働である。剰余価値の前提に価値がある。それを生産するものが物的生産の労働だということは、なぜ貨幣が金でなければならないのか、という問題と同一次元である。今日のように発達した商品経済のもとで、貨幣としての金の人々の目前にいつもはあらわれなくなっているからといって、貨幣が金の現物でしかありえなかった商品経済の歴史的現実を忘れてしまうようでは、経済学は歴史科学であることをやめざるをえなくなる。生産的労働とは、資本制の生産を生み出し支えている労働のことであって、人々の幸福に直接に関連する話ではない。社会主義的生産を生み出し支える社会主義下の生産的労働が資本制下の生産的労働と同じである理論的必然は全くないのであ

43) ペヴズネル131頁、訳書117頁。

る。

社会的生産一般と商品生産とのそのような関連についての意識の稀薄さがヤ・ア・ペヴズネルを理論的困難に追いこむのである。理論的困難というのは、たとえば先に引用した「価格は劣等な企業の諸条件によって規定される」といった命題のことであって、その文章の直後には「なぜならば、もし価格が当該企業の生産費を補償せず、また利潤をもたらさなかったならば、企業は機能することができないであろうし、閉鎖されてしまうであろう」⁴⁴⁾といわれているからである。ここにあるのは、それが少くとも現存する社会主義経済の現実ではなく、資本制の生産の諸資本についての理論である限りは、投下労働価値説ではない、分解価格説ではない、生産費説・構成価格説にもとづく利潤概念だからである。

社会的生産一般と特殊商品生産との区別意識が稀薄なのは、別にヤ・ア・ペヴズネルに限ったことではないし、また、稀薄ではあっても意識がないわけではないことも認めておかなくては公平を欠く。というより、ペヴズネルは、実は社会主義をこそ考えたいのであって、資本主義の理論的研究はそのためのヒントを得るのが目的となっている、とさえ、こんどの書物についてならばいい。しかし、ヤ・ア・ペヴズネルには、マルクスの商品概念から出発したつもりでおりながら、限界分析の手法をとり入れるべく、有用にして稀少（有限）という規定を内容とする経済財の概念に移ったとき、それがどのような飛躍を意味するかについての自覚がほとんどないのである。

経済財の概念がまちがっているだとか、役に立たないだとか、と今わたくしは言おうとしているのでは全くない。むしろ、その概念の有効性を汲みつくすのがよいのである。わたくしがいいたいのは、この概念が、K. マルクスの商品概念と内包・外延ともに異なるものであって、両概念の関係を確定しておくことこそが大

切だ、ということなのである。マルクスの商品とは、使用価値と交換価値の二重物の形態をもつ労働生産物である。二種の価値は全く別のものであって分離対立している。そのようなものとして生産物を生み出し、社会的労働をしたがって社会的生産を組織しているのが、商品生産である。K. マルクスの商品概念は A. スミスの貨物 Commodity に近い。スミスもまた、使用上の価値と交換上の価値は異なる、といっていた。しかし、この点で先駆的な分析を行なったアリストテレスが、物には二つの用途があって、物そのものとしても使えるが交換品としても使える、といっていたときアリストテレスの脳裡にあった物とはかなりちがう。アリストテレスは、労働生産物の商品化が偶然的・周辺的な現象にとどまっていた社会の生産物を想起していたからである。自分の主観的効用よりも高く売れば売り払うが、それより低い値しかつかなければ持ち帰って自分で使う、といわんばかりの舞台で考えたジェヴォンスら限界革命時点の考え方から出発して今日の経済財の概念に至ると、これは、広汎に種々の社会的生産の分析に利用できるが、しかしそれ自身に資本主義的商品生産の理解に上向する特殊な自己展開力を決して内包してはいない概念に変貌したのである。

使用価値と交換価値との二重物としての商品は必ず有用で稀少であるといつてよい。有用だからその物は使用価値なのであるし（もっとも限度をこえて生産された使用価値はマイナス効用でありうるが）、社会的総労働は有限だから、その支出としての生産物は稀少であろう。有用にして稀少な経済財とはいえば、商品以外の労働生産物でもありうるし、さらには、労働生産物以外のものでもありうる。概して内包はより小さく外延は大きいといえよう。もっとも、商品経済は、労働生産物以外のものにも商品形態を与えてゆく傾向をもつが、経済財の概念が歴史的にみてより広く各種の社会的生産に適用できることが決定的にちがうのである。

44) ペヴズネル105頁、訳書94頁。

社会的労働の部門間バランスの問題は、およそ社会的生産に一般的な問題である。どこに産出すべき諸使用価値の構成の最適なあり方があるのか。これを考えようとすれば、まさに限界分析の手法によって明らかにされた限界代替率の均等があらわれてくる。これは、商品経済的価格の問題である以前に、社会的労働の二重性、つまり抽象的人間労働と具体的有用労働のあり方の次元の問題であるといつてよいはずである。ブハーリンは、社会主義社会では生産物は商品の外皮を脱ぎ捨てて単なる労働生産物になる、といつて、いずれにしろ何らかの社会的生産物であるという次元の問題を掃き捨てた。1934年以後のソ連は、商品形態の利用、といった非歴史的、没概念的方法から問題を出発させてしまった。

限界代替率と結びついた均衡価格は、実は現実の市場価格とは非常にちがったものである。ヤ・ア・ペヴズネルは、労働支出による価値から社会的必要労働にもとづく市場価値を経て市場価格へという展望の中で、むしろ市場価格の次元に均衡価格を置こうとしているようにみえるが、その位置づけは適切とはいえない。

問題がむづかしいのは、ヤ・ア・ペヴズネルが適切に受け容れを拒んでいる自由競争の理想化と生産諸要素への帰属説とがこれら限界分析といつも結びついているところである。自由競争を極端にまで抽象化、理想化した完全競争は、むしろどこにも存在していないような一つの公準、概念装置であるし、帰属理論は、土地や資本の社会的配分を自明のこと、ないしは与件としてしまって、土地や資本の貢献をいともあっさりと土地や資本の所有者の貢献と置きかえて、社会的な生産物の総体の中から地代や利子を彼らに帰属させてしまっている。この二つの要素を拒否しつつ、限界分析の有効な吸収を計ろうということになると、問題はもう『資本論』の再読の領域の外にあるというべきであろう。資本制下の価格を理想化することはない。

社会的生産の部門間バランスの最適化、およ

び社会的労働の生産力の向上を考えるならば、完全な私的所有から出発して、あたかも各個人が消費者として、支払ってもよいと思う価格以下で購入することによる消費者余剰を大きくし生産者として最劣等者より以上であることによる剰余を自分のものにするという刺激によらずとも可能ではないか。企業や職場の労働集団の成果配分方式による集団ごとの所得格差を、職種別の標準賃金格差にかみ合せ、限界代替率均等を顕現させるための消費者の選択の自由を保障する、ことはできないか。たとえば不良在庫には何らかのデメリットを、また行列を放置することにもデメリットを、ただし行列があれば追加資財要求権が発生する、そして需要に応ずれば配分すべき成果があがる、といったような関連は構想できるはずであり、現に経済改革の中で種々試みられているはずである。すべてを価格シグナルに集約することはない。物量シグナルも大いに利用すべきであろう。資本主義下でさえ、巨大企業が行なう在庫管理や需要把握は、コンピュータ・ネットワークを利用した直接的即時的なものになりつつあるのである。

帰属理論に関していえば、この理論の問題性は、社会的生産物の一部を土地や資本に自然的に帰属させ、その上で、その帰属部分を土地や資本の所有者にあたかも当然のように帰属させることにある。こうした理論の古典的形態が、土地には地代、資本には利潤、労働には賃金を権利づけて、それらの事後的構成としての価値生産物を考える三位一体説である。K. マルクスは D. リカードを継承しながら労働によって産出せられた価値生産物が賃金、利潤、地代に分割されてゆくのであり、利子も地代もそうした脈路の中に剰余価値の転化形態であると位置づけたわけである。

しかし、K. マルクスを継承する理論が利子や地代を剰余価値の転化物であるゆえに好ましくないもの、あるべきではないものとみるのでは、少くとも今日の課題には耐ええない。たとえ商品価値が存在しない社会でも、そこに社会

的生産があるかぎり、具体的有用労働と並んで抽象的人間労働があるように、社会的生産一般に機能する姿においてみれば、地代や利子は、有限な生産資源、稀少な資源を利用するさいの社会的標準を個々の生産者に指示するものである。つまり地代は、肥沃度ほかに様々に差のある稀少な土地を利用することについて、個々の生産者に全体としての社会が強制する社会生産性の標準を指示しているのであり、利子は、同様にして稀少な資財あるいは資金（つまりA. スミスのなストックであって増殖しつつある価値というK. マルクスのな資本ではない）を利用する個々の生産者に、全体としての社会が強制する社会的生産性の標準を指示しているのである。もちろんそれは、平均に近い標準であるよりは許容できる最低標準を指示しているわけだが、ともかく、そのような意味で、地代や利子は、社会的生産一般の次元でも意味をもつそうした何かを内包しているのである。

それらは、決して、土地所有者への地代、金利生活者のふところにする利子でなければならぬものではない。社会主義経済においては、それは、土地や資財ないし資金の全体の運用のあり方に責任をもつ何らかの機関によって収納

され、何らかの社会的目的に応じて支出されることになるであろう。資本制の生産においてさえ、地代はしばしば不動産会社によって再度利潤の形態にもどり、利子もまたしばしば銀行や証券会社によって利潤の形態にもどっているのである。しかしまた、一方、社会主義経済は、地代や利子に照応する何かを無視することによっては、効率的な運営を達成しえないであろう。

ヤ・ア・ペヴズネルが求めている理論領域は、商品生産にもとづく狭義の市場価格の概念に注目して、商品の概念を経済財の概念と置き換えていくところではなく、商品の概念を分析して、より抽象度の高い社会的生産物一般へと下向し、その次元において経済財の概念を吸収しつつ、どのように社会主義的生産物へと上向してゆくか、というところにあるのだ。ペヴズネルの労働価値説はK. マルクスのそれからかなりズレてしまっている。そうなった理由は社会的生産物の商品形態の厳格に歴史的な性格をあいまいにしてしまったところにある。そしてこれは、ソ連における1920年代の価値論論争を終結した1943年の理論に遠因をもっているのである⁴⁵⁾。

45) 拙著『賃労働論の展開』、(御茶の水書房、1978)の第1部を参照されたし。